

+ 19 【きよんぼん】

いつからか、ぼくの村は周りの村から、〈おぼけ村〉とよばれはじめていて、それはぼくの最大の自慢でした。

「がいこくにも、おぼけむらはあるんかのう」

と懐爺にきくと、

「あるという噂はききますが、なにしろわたしは外国へ行ったことがありませんからねえ」

「でも、あのよへは、いったことあるじゃろ」

こどもながらに、かまをかけると、

「しかし外国にも、当然おぼけはいます」

と、懐爺はしらばっくれました。

「がいこくのおぼけも、みてみたいのう」

懐爺は乱杭歯（らんぐいば）をむきだしにして笑ってから、おもむろに話します。

「西洋で一番こわいのは【きゅうけつき】です。これは人間の生き血を吸います。吸われた人間は、死ぬか自分も【きゅうけつき】になってしまいます。新しいところでは、【ぞんび】もこわい。これもやることは【きゅうけつき】に似ていますが、ちがうのはひどく汚いところで、わたしによく似ています。中国で一番こわいのは、やはり【きよんしー】ですかね。これはこどものおぼけで、この村でもたまに出没（しゅつぽつ）します。村のひとたちは【きよんしー】とはいわずに、【きよんぼん】たまに【きよんきよん】とかよんでいますね」

「【きよんぼん】たあ、かわいらしいなまえじゃのう。ちっともこわくなさそうじゃのう」

「ところが【きよんぼん】は、見かけによらず武術（ぶじゅつ）の達人（たつじん）なのです。どんなに強い者が立ち向かって、こども相手のはずが、おとな相手に赤ちゃんが闘っているかんで、まったく歯がたちません」

懐爺は【きよんぼん】が使う武術の真似をしました。

「かいじいでも、だめかい」

「わたしは立ち向かいません」

そんなはずはないがまあいいか。

「わしは、たちむかいたいとう。ぶじゅつをべんきょうしたいとう」

「金ちゃんは武術をやる必要はありませんよ。ほとんどの武術の根っこにあるのは、〈こわいものしらず〉ということで、そういう人間は武術を習わなくとも、同じ力を有しているのです。金ちゃんはおぼけ相手に鍛（きた）えていますから、いまや武術家よりも上じゃないでしょうかねえ」

「そんなら【きよんぼん】とたたかえるかのう」

「戦えます。【きよんぼん】にとって最もおそろしい相手は〈こわいものしらず〉なんです。十中八九勝てます。勝てます勝てますとも」

懐爺は妙にいい張りました。

「ごぶごぶでもいいから、たたかいたいとう」

というわけで、ぼくは【きよんぼん】が出没するという山寺へ行きました。

学校帰りに毎日立ち寄りしました。

勝手に作った歌を歌いながら、【きよんぼん】の出現を待ち続けていました。

きよんぼんぼん
きよんきよんぼん
でてこいでてこい
でこぼんぼん
ぼんぼんと
てのなるほうへ
やってこい
ほうらぼんぼん
きよんぼんぼん

けれども何日経っても【きよんぼん】には遭えませんでした。

懐爺は真面目くさって、

「【きよんぼん】は、金ちゃんがこわくてでてこられないのですよ」

といったけれども、ぼくのために、懐爺がさっさと退治してしまった

のだと、ぼくはかんがえたものでした。